

平成30年度第61回 関東高校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

6月2日～4日の3日間で第61回関東高等学校サッカー大会が群馬県で開催された。

大会は各都県1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとして、それぞれトーナメント方式で実施された。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする規定がある。埼玉県からは県予選の結果、Aグループに成徳深谷高校、Bグループに立教新座高校が出場した。

成徳深谷高校は1回戦で古河第一高校（茨城）と対戦し、先制点を奪われる厳しい状況ながらも3-1と逆転勝利を収め、準決勝の帝京第三高校（山梨）との試合はスコアレスのままPK戦に突入し、PK戦で3-1で勝利、決勝へと駒を進めた。地元の前橋育英高校（群馬）との決勝は1-2で敗れたため、準優勝という結果を残した。いっぽうの立教新座高校は1回戦で東海大甲府高校（山梨）に1-2で敗れ、初戦敗退という結果に終わった。

成徳深谷高校の初戦は、県予選と同様FW⑮戸澤が相手SBの背後をつき、そこへのロングボールを配給して相手エリアに押し込む時間帯を長くする戦術をとっていた。対する古河第一高校は県予選での成徳深谷高校の戦術を事前に把握し、1-4-4-2のシステムで3ラインの縦横の選手同士の距離間が非常に良い状態を保っていた。そのため成徳深谷高校がなかなか決定機を作り出せずにいると、前半31分にラインを上げていた成徳深谷高校の背後のスペースに走り込んだ古河第一高校のFW⑭前田にロングボールが入り、GKの頭上を超える見事なループシュートで古河第一高校が先制に成功した。後半に入っても古河第一高校のDFラインを攻略できずにいた成徳深谷高校を救ったのは、県予選の決勝でも先制の起点となったDF⑤長谷のロングスローであった。ロングスローのこぼれ球をDF③堀井が頭で押し込み同点に成功すると、成徳深谷高校はFW⑩北原や途中投入のMF⑬新井が積極的にドリブルを仕掛け、相手のファウルを誘う場面が増える。74分には相手ファウルで獲得したMF⑥藤田のFKが風に乗って直接ゴールに吸い込まれると逆転に成功。追う立場となった古河第一高校は、それまで良い距離感を保って守備網を張っていたが、逆転を狙い前掛かりになったことで選手間の距離が広がりだした。成徳深谷高校は後半アディショナルタイムにその守備網の隙間をついて途中投入のFW⑪間中がカットインからの見事なミドルシュートを突き刺して勝負を決定づけた。

帝京第三高校との準決勝では1-4-2-3-1と若干のシステム変更をして臨んだ成徳深谷高校であったが、基本的な戦い方は1回戦と同様であった。両チームともに前半から守備意識が高く、前半は膠着状態のまま終える。連日の試合ということもあり、後半運動量が落ちてくると、両チームともに2トップを交代して前線の活性化を図る。延長では途中投入された成徳深谷高校のFW⑩北原が決定機を作り出すも、最後のところで帝京第三高校のDFが体を張ってゴールラインを割らせず勝負はPK戦へ。PK戦では成徳深谷高校のGK①神尾が素晴らしい反応を見せて3本を止めると、3-1で決勝進出を決めた。

決勝の相手前橋育英高校は今大会最もテクニカルで完成度の高いチームであった。成徳深谷高校の縦に早い攻撃に対しては一人ひとりが適格なポジションをとり、ほとんどバランスを崩さずにボールを奪い、一度ボールを奪うとピッチを広く使ったテンポの良いパスワークでボールを失わない。厳しい守備

で相手を自由にさせず県予選を勝ち抜いた成徳深谷高校のプレスに対しても前橋育英高校の選手は、サポートの質が非常に高く、常にボール保持者に複数の選択肢を与えられる位置（距離や角度）を取っており、個人個人のサッカーへの理解度が高いことが感じ取れた。成徳深谷高校は、65分にFW⑩北原との連携から抜け出したFW⑪間中が左からゴールライン際に切れ込みGK①高橋の脇を抜く見事なコントロールシュートで一矢報いたが、1-2というスコア以上にシュート本数成徳深谷高校3本に対して前橋育英高校16本というスタッツが現時点での力の差を表しているといえるのではないだろうか。

Bグループの立教新座高校は1回戦で東海大甲府高校と対戦した。立教新座高校は前線からの連動した守備が機能する。高い位置でボールを奪い、フィジカルで勝るFW⑩稲垣にボールを預け、両翼のMF⑦新谷や⑨渡邊が素早く駆け上がるショートカウンターでゴール前に迫るシーンを作る。しかし得点には至らずにいると、前半アディショナルタイムの東海大甲府高校のCKがファーサイドのポストに当たり、立教新座DFの足に当たったこぼれ球を押し込まれて先制を許してしまう。後半も押し気味に試合を進める立教新座高校であったが、東海大甲府高校はMF⑥榎原の展開力を生かしたカウンターで追加点を狙う。53分にはそのMF⑥榎原を起点にしたカウンターが見事に決まり、東海大甲府高校がリードを2点に広げる。立教新座高校は県予選と同様、DFの南口をFWへと押し上げ、終盤のパワープレーから71分にMF⑧渡邊が追撃弾をあげるが及ばず、1-2で敗戦となった。スタッツ上ではシュート・GK・CKともに相手を上回る内容であっただけに今後はフィニッシュの精度を上げていくことが求められそうだ。

今大会は地元開催となった群馬県勢の活躍が目をつけた。優勝を果たした前橋育英高校は前述した通りであるが、さらにBグループでも優勝を果たした群馬県の桐生第一高校は今大会の3試合で16得点と爆発的な攻撃力を見せつけた。関東大会群馬県予選決勝こそ前橋育英高校に0-1で後塵を拝したものの、その前の新人戦では逆に1-0で勝利を取っている。今後の活躍が楽しみなチームの1つである。

大会をデータで振り返ると、各チームの1試合平均交代人数は約4人となっている。大会規定では1試合の最大交代人数は5人となっているため、ほぼ毎試合最大限に利用するチームが多かったと言える。理由として考えられることは、①3日間で3試合という短期集中開催で、18名登録という選手権大会よりも少人数で連戦を戦いぬく。②今大会開催期間中の会場では30℃を越す気温が続いたことが考えられる。またそれ以外にも重要な理由としては、③都県によっては関東大会を終えると翌週から学校総合体育大会の県予選が始まるところもあり、その前に格好の強化の舞台である関東大会でより多くの選手の可能性を探る意味合いもあったことが推測できる。特に関東大会ではプリンスリーグ以上に所属しているチームは参加をしていない（群馬県を除く）ため、夏の全国学校総合体育大会出場のためにはそれらのチームを倒さなければならない。神奈川（桐光学園）、千葉（流通経済大学附属柏・市立船橋）、山梨（山梨学院）、栃木（矢板中央）など該当する県の代表チームは少なからずそういった「次」の意識を持ってこの関東大会に臨んだはずである。現状において埼玉県ではプリンス以上に所属しているチームがおらず、その部分での意識の差が今後どう出るか、注視していきたい。